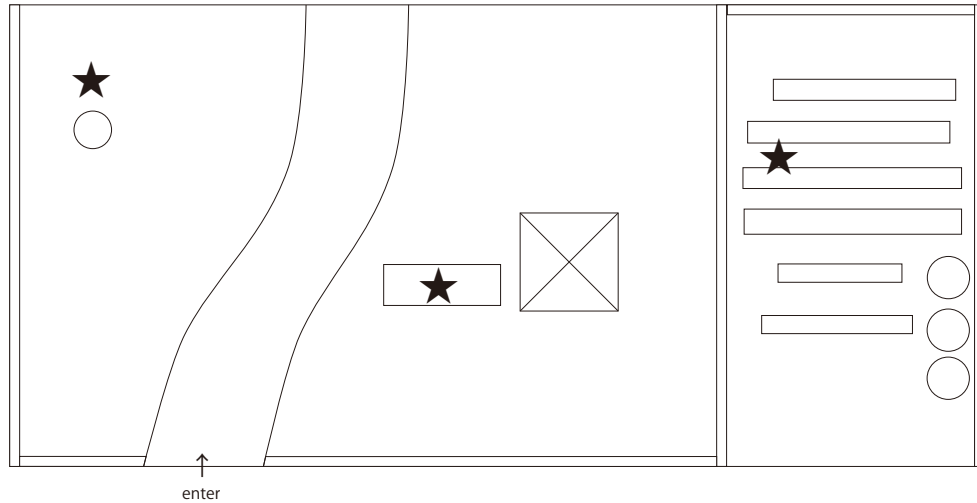


Ground Channel

2012 / インスタレーション（ヘッドフォン、IC レコーダー）

鑑賞の手引き

- この作品はヘッドフォンから聞こえる「音」を鑑賞するものです。
- ヘッドフォンは会場に3カ所設置されています。
- ヘッドフォンは地中から延びたコードとつながれています。装着時はコードを引っ張らないようご注意ください。
- 使用後は元の位置に戻して下さい。
- 本作品は会期中のみライブ配信サイト Ustream で鑑賞することができます。 → <http://www.ustream.tv/channel/ground-channel>



【コードカラー美術館】

ある家に、その家を芸術空間として開く鍵となる色を塗った擬似建築物を作り設置し、家人を美術館館長や学芸員とし、その家庭の美学に基づいた美術館活動を行なうプロジェクト。

コードカラー（四色を混ぜて作った家人が好きな色）によって美術館となった家は、○○コードカラー美術館と名づけられます。

岡本記念コードカラー美術館は、岡本家の美学に基づいて美術館活動を行っています。

ー コードカラー美術館プロジェクト企画：松本春崇

Code Color Museum project

NOZOMI WATANABE | Ground Channel

Saturday, 3 November - Sunday, 25 November, 2012

地中の声を聞く

初めて岡本さんの庭を訪れたのは7月の半ばを過ぎた頃だった。その時期にしては日差しはやや弱く、僅かに風がそよぐ過ぎやすい日だった。その日、見慣れぬ駅をいくつも通り過ぎ、私は北総鉄道北総線、北国分駅に降り立った。いつも初めて訪れる土地をみて思うことがある。それは土地にはその土地特有の色があるということだ。そこでみる空や人、建物や木々たち、空気さえも一層の膜がかかったように土地の色に染まっている。岡本さんの庭の植物たちも、これから来るであろう本格的な夏に向け、いっそうその色を増し佇んでいた。

私は一目みてこの庭と、そこに育つ植物たちを気に入った。

通常の家では、塀や柵、あるいは垣根といったもので、道路と庭の境を明確に分けているのだが、ここ、岡本さんの庭にはそういったものはない。道路から一段上がり、緩やかな傾斜をもって家の前にひろがっている。岡本さんの庭は個人宅の庭というプライベートな機能を備えつつ、近隣住民に開かれた場でもあるようだ。その開放感からか、他の家にはない独特な存在

感を感じさせる。また目をみはるのが、植物たちのバランスのとれた配置だ。植物の高さ、彩り、隣合うもの同士の関係は、まるであらかじめ決められた規則でもあるかのように、場にびたりとはまっている。

毎朝、庭の手入れをするという岡本さんは、庭をいくつかのブロックにわけ、季節ごとの植物を入れ替えるという。少しずつ、少しずつ、通りを通る人に気づかれないように入れ替え、2ヶ月後にはまったく違う庭の様相になっているそうだ。またよくみると、庭には植物以外にも、何やら鳥や猫、貝殻といった置物が置いてある。異物のようでいながら、やはり岡本さんの手によってしっかりとその場に根付いている。植物も置物も岡本さんにとっては同じ庭を彩る要素の一部なのだろう。岡本さんにどのようにして植物を植える場所を決めているのかと尋ねたところ、「スケッチ気分で行っている」という答えが返ってきた。まるで絵を描いていくように、この場所にこんな色の花があつたらいいな。と自分の感覚に従って植物を植えていくのだという。

岡本さんの庭は大きなキャンパスなのだ。そしてその庭は、岡本さんの手によって描かれた作品そのもののなのだ。まさに今回のプロジェクトの趣旨に沿うようにして美術館として存在する岡本さんの庭は、岡本さんの美学によって成立していた。

それからの日々、岡本さんの庭を思っては、どのようにしてあの場に作品を成立させることができるのかと頭を巡らせていた。何かあの場に寄り添うような形で作品をつくれなかと。

その答えを探っていくうちに、ある日、興味深い記事を見つけた。それは「植物が根から音を出し、互いに会話をしている。」というものだ。最近の研究で明らかになったこの事実は、南オーストラリア大学の研究グループによって Trends in Plant Science 誌に発表されたものだ。植物が音楽や人間の言葉に反応することは現在ではよく知られていることだが、植物自身も地中の根から音を発しているという事実を知る者はまだ少ないだろう。

口や耳を持たない植物が、実は音を介し私たちと同じようにコミュニケーションをとっている。私は、そんな植物たちの会話にそっと耳を傾けたいと思った。岡本さんによって植えられ、育てられた植物たちはどんな会話をしているのだろうか。日々この庭で感じる光や音、気温、あるいは人々の視線に植物たちは何を思っているのだろうか。

ただじっと地中の声に耳をすませる。その行為が、人と人を取り巻く世界との関わりに触れる契機となることを願って。

一 渡辺望